

「緩和ケア」があたりまえの世の中になるように

緩和ケアとは、病気に伴う心と体の痛みを和らげること

日本人の2人に1人ががんにかかると言われる時代。がんによる心身の苦痛をやわらげる「緩和ケア」を広く知ってもらうためのイベントが、2月5日にサッポロファクトリーで開催されました。

主催 / 特定非営利活動法人 日本緩和医療学会
後援 / 北海道、札幌市、一般社団法人北海道医師会、一般社団法人札幌市医師会、一般社団法人北海道歯科医師会、一般社団法人札幌歯科医師会、北海道がん診療連携協議会、一般社団法人北海道薬剤師会、札幌市在宅医療協議会、一般社団法人 全国がん患者団体連合会、一般社団法人日本がんサポーティブケア学会、一般社団法人日本がん看護学会、一般社団法人日本サイコオンコロジー学会、一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会、一般社団法人日本ペインクリニック学会、特定非営利活動法人日本ホスピス・在宅ケア研究会、特定非営利活動法人日本ホスピス緩和ケア協会、一般社団法人日本緩和医療学会、一般社団法人日本癌治療学会、一般社団法人日本在宅医学会、一般社団法人日本在宅医療学会、公益社団法人日本放射線腫瘍学会、公益社団法人日本麻酔科学会、公益社団法人日本臨床腫瘍学会、一般社団法人日本臨床腫瘍学会、一般社団法人日本老年医学会、北海道新聞社



街かど緩和ケア講座

緩和ケアとは？ ～疾病と共に健やかさを生きるために～

緩和ケアは風邪の熱を下げるのと同じ目的での「薬にするケア」。がん治療と並行して痛みや心の不安をやわらげるケアを行い、より良く生きることを目指します。がんのつらさにとらわれることなく、普通に生活できる力を取り戻すために、緩和ケアを活用してください。



日本緩和医療学会副理事長
帝京大学医学部緩和医療学講座教授・診療科長
有賀 悦子氏

緩和ケアはがんと診断された時から



2月5日のイベントでは専門家7名による緩和ケア講座が開催され、延べ1000人を超える参加者が熱心に耳を傾けていました。

医療用麻薬の誤解を解く

医療用麻薬は不正薬物とは違い、国が有効性・安全性を認めた痛み治療のお薬です。医師の適切な処方により依存症の心配はなく、生活の質の向上や生存期間の延長にもつながります。薬と上手に付き合うことにより、痛みを我慢せず自分らしい生活を送ることが出来ます。



株式会社ファーマホールディング事業統括本部
医療連携推進セクション副部長・緩和薬物療法認定薬剤師
久原 幸氏

あなたらしい暮らしを守るための緩和ケア

がんになったら誰もが不安になるものですが、現在は早期発見・早期治療により生存率が向上しています。治療にあたる医療スタッフはもちろんあなたらしい暮らしをサポートする皆さんの専門家がいます。まずは相談してみること。それが緩和ケアの第一歩です。



カレスサッポロ時計記念病院・クリニック
主任・がん看護専門看護師
吉田 奈美江氏

がんになっても一人じゃない ～支え合いの輪を広げよう～

がんの不安や悩みはひとりでは抱えていても解決できません。身近な人や専門家に話を聞いてもらったり、患者同士の交流に参加することで気持ちが楽になります。全国各地のがん相談支援センターでも治療や療養生活に関する相談に応じているのでぜひ活用してください。



NPO法人 市民と共に創るホスピスケアの会
副代表理事
山田 富美子氏

がんを治療しながら 仕事を続ける知識と心構え

退職又は労働条件を変更すると収入が減ってしまいます。仕事を継続できそうな状況なら自分の生きがいや家族を守るため、退職せず健康保険の傷病手当金を活用しましょう。労働条件変更には労使間の「合意」が必要です。就業規則や労働条件を確認することも大切です。



アモール社労士事務所
代表・社会保険労務士
市村 通乃氏

がんのことだけじゃない、人生のことを話し合おう

大切なのはその人らしい人生のあり方について家族や医師と一緒に話し合うこと。患者さん自身も他者と話し合うことで大切なものに気づいたり、納得できることもあります。医師の側も患者さんの心に寄り添い治療を進めるために、緩和ケアへの一層の理解が求められます。



市立札幌病院
精神医療センター
副院長
上村 恵一氏

近年は治療方針の決定を患者自身に委ねる傾向にあります。その人にとって最良の決定をするには、その人が大切にしていることを知る必要があります。がんだけではなく患者自身の人生について医師や家族と一緒に話し合ってみてください。これも大切な緩和ケアなのです。



旭川医科大学病院
緩和ケア診療部
副部長
阿部 泰之氏

緩和ケア ガallery 展示

全国に広がりつつある緩和ケア
2006年に「がん対策基本法」が成立。この10年の間に、どの病院でもがん治療と並行して緩和ケアが受けられる体制の整備が進みました。全国のがん診療連携拠点病

院(約400カ所)、緩和ケア病棟がある施設(約360カ所)では、より専門的なケアも受けられます。緩和ケアを担う専門家も増え、痛みや不快な症状の改善、心のケア、生活全般に関する相談など、さまざまな形で患者さんとご家族を支援しています。治療と並行して専門的緩和ケアを受けると生活の質が改善され、予後にも好影響があるとの調査報告もあります。



イベント会場では緩和ケアの10年の歩みと未来展望を描いたデジタル紙芝居やパネルを展示。多くの人々が足を留めていました。

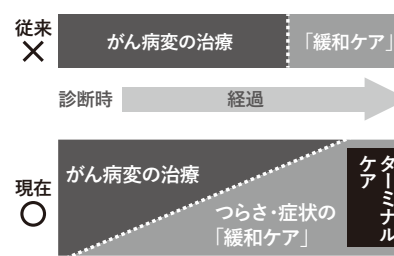
病があっても豊かな人生を生きるために
緩和ケアの目的は、たとえ病院・入院治療が必要でも患者さんが自分らしく仕事や家庭生活を営み、本人もご家族も豊かな人生を送れるように支えること。今は健康でも病気になる保証はどこにもありません。10年後にはがんだけでなくあらゆるつらい病気にも緩和ケアが当たり前に提供される社会になるでしょう。そうなれば、患者さんやご家族の暮らしはどれほど楽になり、その人らしい生活が送れるようになるのでしょうか。そんな未来のために、私たち一人ひとりが緩和ケアへの理解を深めることが望まれます。

「緩和ケア」はがんと診断された時から、がんの治療と同時に始めることができます。

ターミナルケア(終末期ケア)とは「緩和ケア」の概念の一部です。

ターミナルケアとはがんの終末期に行われる、治療や延命ではなく主に痛みなど身体的な苦痛をはじめ、精神的な苦痛等の緩和を目的としたケアを指しています。

一方、緩和ケアは「がんにより心と体の痛みを抱える患者さんやそのご家族により早い段階から考慮すべきもの」と考えられており、がんによる心と体の痛みを和らげることをはじめ、患者さんとそのご家族にとってできる限り最高のQOL(生活の質)を実現するためのケアを意味しています。



クイズラリー



緩和ケアに関するクイズに答えた参加者にはオリジナルエコバッグがプレゼントされました。

ブース出展



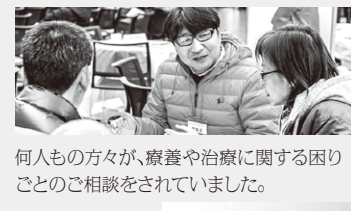
緩和ケアに関わる各種団体がブースを出展。緩和ケアの相談サロンで話を聞く参加者の姿も。

がん診療連携拠点病院紹介



道内のがん診療連携拠点病院における緩和ケアの取り組みがパネルで紹介されました。

緩和ケア相談サロン



何人もの方々が、療養や治療に関する困りごとのご相談をされていました。

緩和ケア 動画上映